

令和3年度島根県学力調査結果（概要）について

浜田市教育委員会

1 調査の概要

(1) 目的

学習指導要領における各教科の目標や内容に照らした学習の状況及び学習や生活に関する意識や実態を客観的に把握し、児童生徒に必要な指導・支援を行うとともに、全国学力・学習状況調査等で明らかになった学習指導上の課題の改善状況を検証し、今後の学校における指導と教育施策の一層の改善・充実に資する。

(2) 調査日 令和3年12月7日（火）

(3) 実施対象学年及び実施教科等

小学校5・6年生：国語・算数

中学校1・2年生：国語・数学・英語

※ 全対象学年に、「生活・学習意識に関する調査」を実施

(4) 用語説明

「平均正答率」 各学年・教科において、児童生徒個人が正答した問題の割合（％）を県または市町村単位で平均した値。

「全国」 本調査に参加している全国の自治体を表す。

2 浜田市・島根県・全国の平均正答率及び浜田市の島根県・全国との差

| | | 国語 | 算数・数学 | 英語 |
|----|---------|------|-------|------|
| 小5 | 市平均正答率 | 61.4 | 55.6 | |
| | 県平均正答率 | 63.0 | 58.9 | |
| | 市－県 | -1.6 | -3.3 | |
| | 全国平均正答率 | 68.9 | 63.8 | |
| | 市－全国 | -7.5 | -8.2 | |
| 小6 | 市平均正答率 | 66.6 | 66.4 | |
| | 県平均正答率 | 66.3 | 66.1 | |
| | 市－県 | +0.3 | +0.3 | |
| | 全国平均正答率 | 69.2 | 72.6 | |
| | 市－全国 | -2.6 | -6.2 | |
| 中1 | 市平均正答率 | 55.7 | 48.6 | 49.9 |
| | 県平均正答率 | 58.9 | 53.1 | 52.7 |
| | 市－県 | -3.2 | -4.5 | -2.8 |
| | 全国平均正答率 | 61.4 | 57.0 | 55.2 |
| | 市－全国 | -5.7 | -8.4 | -5.3 |
| 中2 | 市平均正答率 | 60.2 | 50.6 | 43.4 |
| | 県平均正答率 | 60.3 | 51.8 | 44.3 |
| | 市－県 | -0.1 | -1.2 | -0.9 |
| | 全国平均正答率 | 62.0 | 55.9 | 46.9 |
| | 市－全国 | -1.8 | -5.3 | -3.5 |

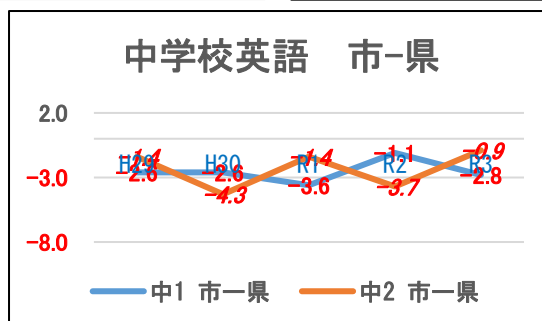
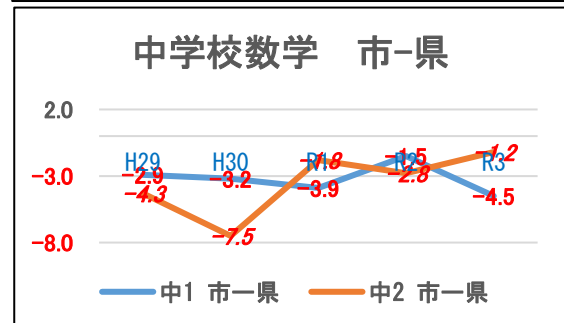
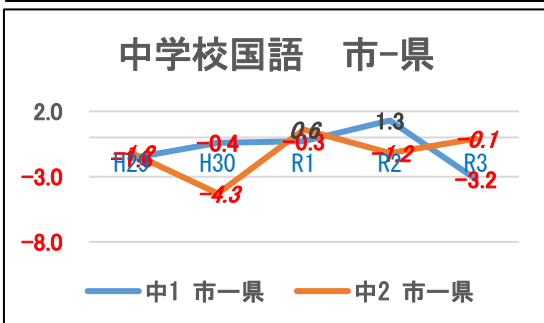
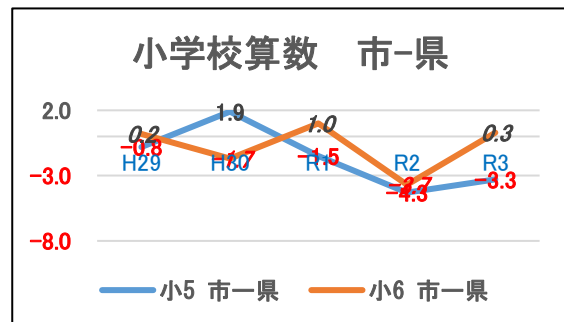
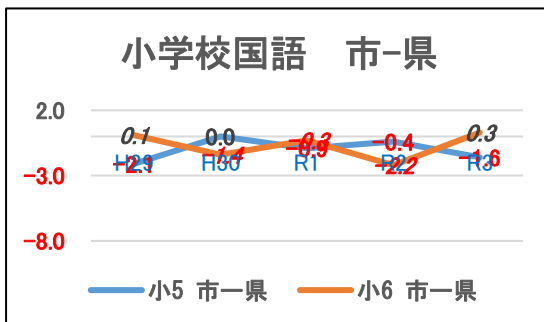
〈小学校6年生における令和3年度全国及び県学力調査の平均正答率の差〉

| 教科 | 項目 | 全国学力調査（5月） | 県学力調査（12月） |
|----|--------|------------|------------|
| 国語 | 市平均正答率 | 61.0 | 66.6 |
| | 県平均正答率 | 63.0 | 66.3 |
| | 市-県 | -2.0 | +0.3 |
| 算数 | 市平均正答率 | 64.0 | 66.4 |
| | 県平均正答率 | 67.0 | 66.1 |
| | 市-県 | -3.0 | +0.3 |

3 島根県と浜田市の平均正答率差の経年比較状況

(1) 年度ごとの県平均正答率差 (○は前年度を上回り、△は下回った教科)

| 学年 | 教科 | H29年度 | H30年度 | R元年度 | R2年度 | R3年度 |
|----|----|-------|--------|--------|--------|--------|
| 小5 | 国語 | -2.1 | ○ 0.0 | △ -0.9 | ○ -0.4 | △ -1.6 |
| | 算数 | -0.8 | ○ 1.9 | △ -1.5 | △ -4.3 | ○ -3.3 |
| 小6 | 国語 | 0.1 | △ -1.4 | ○ -0.3 | △ -2.2 | ○ 0.3 |
| | 算数 | 0.2 | △ -1.7 | ○ 1.0 | △ -3.7 | ○ 0.3 |
| 中1 | 国語 | -1.6 | ○ -0.4 | ○ -0.3 | ○ 1.3 | △ -3.2 |
| | 数学 | -2.9 | △ -3.2 | △ -3.9 | ○ -1.5 | △ -4.5 |
| | 英語 | -2.6 | -2.6 | △ -3.6 | ○ -1.1 | △ -2.8 |
| 中2 | 国語 | -1.2 | △ -4.3 | ○ 0.6 | △ -1.1 | ○ -0.1 |
| | 数学 | -4.3 | △ -7.5 | ○ -1.8 | △ -2.8 | ○ -1.2 |
| | 英語 | -1.4 | △ -4.3 | ○ -1.4 | △ -3.7 | ○ -0.9 |



(2) 調査該当学年の県平均正答率差の経年比較 (○は前学年を上回り、△は下回った教科)

① 現小学校6年

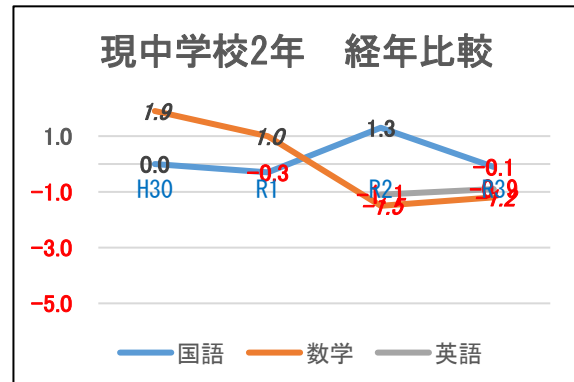
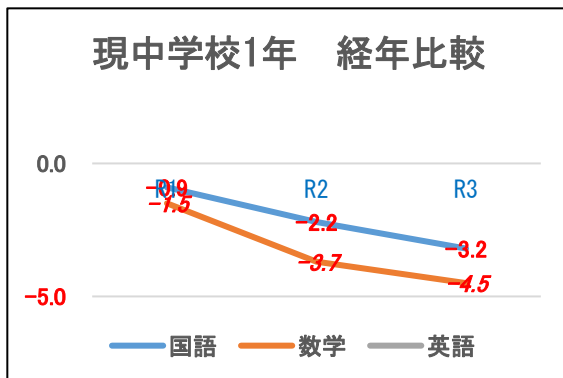
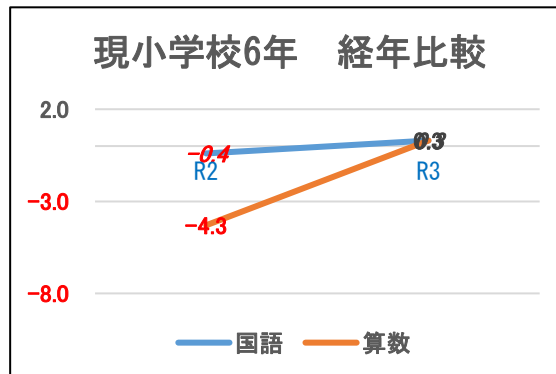
| 学年 | 教科 | R2 (小5) | R3 (小6) |
|-----|----|---------|---------|
| 現小6 | 国語 | -0.4 | ○ 0.3 |
| | 算数 | -4.3 | ○ 0.3 |

② 現中学校1年

| 学年 | 教科 | R1 (小5) | R2 (小6) | R3 (中1) |
|-----|----|---------|---------|---------|
| 現中1 | 国語 | -0.9 | △ -2.2 | △ -3.2 |
| | 数学 | -1.5 | △ -3.7 | △ -4.5 |
| | 英語 | | | -2.8 |

③ 現中学校2年

| 学年 | 教科 | H30 (小5) | R1 (小6) | R2 (中1) | R3 (中2) |
|-----|----|----------|---------|---------|---------|
| 現中2 | 国語 | 0.0 | ○ -0.3 | ○ 1.3 | ○ -0.1 |
| | 数学 | -1.9 | ○ 1.0 | △ -1.5 | ○ -1.2 |
| | 英語 | | | -1.1 | ○ -0.9 |



4 各教科の状況

(1) 教科の全体的な状況について

※ここでいう「全国」とは、本調査に参加している全国の自治体を表す。

- 小学校について全国と比較すると、国語、算数ともに全国平均正答率を下回り、課題がある。
- 中学校について全国と比較すると、国語、数学、英語ともに全国平均正答率を下回り、課題がある。
- 小学校5年については、県平均正答率との差が国語は-1.6 P、算数は-3.3 Pの差で、特に算数に課題がある。小学校6年については、国語、算数ともに県平均正答率との差が+0.3 P上回った。
- 中学校1年については、県平均正答率との差が国語は-3.2 P、数学は-4.5 P、

英語は－2.8Pで課題がある。中学校2年については、県平均正答率との差が－0.1P～－1.2Pで±2P以内であることから、国語、数学、英語ともにほぼ同率である。

(2) 各教科の結果からみられる成果(○)と課題(▲)、考えられる指導ポイント(★)

<国語>

- 小学校6年においては、0.3Pではあるが県平均正答率を上回っている。領域別では、「言葉の特徴や使い方に関する事項」で1.5P、「我が国の言語文化に関する事項」で0.7P、「書くこと」で1.1P県平均正答率を上回っている。
- 「我が国の言語文化に関する事項」については、中学校1年が5.3P、2年が3.0P県平均正答率を上回り、「書くこと」については、中学校2年が2.1P上回っている。
- 小学校5・6年及び中学校2年の県平均正答率との差は、0.3Pから－1.6Pの間であり、県平均正答率とほぼ同率である。
- 児童生徒の平均正答率を前年度の該当学年と比較すると、小学校6年が－2.2P→0.3P、中学校2年が－1.1P→－0.1Pとなっており、改善傾向は見られている。
- ▲ 中学校1年は、県平均正答率との差が3.2P下回っている。
- ▲ 領域別では、県平均正答率と比較して、中学校2年を除いて「書くこと」の領域に課題がある。
- ▲ 「読む」領域については、県平均正答率と比較して小学校5年は－3.9P、小学校6年は－1.4P、中学校1年は－4.0P、中学校2年は－0.4P下回っている。
- ▲ 出題形式では、全ての学年の最終問題において出題されている「指定された長さや段落で自己の考えを明確にして書く」ことについて課題があり、無回答率も他の設問と比較して高い。この設問の県平均正答率との比較では、正答率は県平均を若干下回り、無回答率は低いが、ほぼ同率である。
- ▲ 児童生徒の平均正答率を前年度の該当学年と比較すると、小学校5年は－0.4P→－1.6P、中学校1年は1.3P→－3.2Pと下がっている。
- ★ 課題に対して必要な情報を収集して考え、根拠を明確にしながらか説明をしていく力を付けていく取組を強化していく。また、自己の考えの根拠を示しながら、一定の条件の下で記述していく力も育てていく。

これらのことに迫るために、読解力の育成を目指した指定校の取組への支援を充実するとともに、その取組の成果を各学校へ広げていく。また、図書館活用教育、調べる学習等の取組も継続していく。

<算数・数学>

- 小学校6年は県平均正答率との差が0.3Pではあるが上回っている。領域別では、県平均正答率との差は「数と計算」が+0.7P、「図形」が+0.1P、「変化と関係」が－0.6Pであり、県平均正答率とほぼ同率である。
- 中学校2年の「数と式」についても県平均正答率を0.4P上回っており、県平均正答率と同率である。
- 児童生徒の平均正答率を前年度の該当学年と比較すると、小学校5年が－4.3P→－3.3P、小学校6年が－3.7P→0.3P、中学校2年が－2.8P→－1.2Pとなっており、改善傾向は見られている。
- ▲ 県平均正答率と比較すると、小学校5年生が3.3P、中学校1年が4.5P下回っている。
- ▲ 領域別では、県平均正答率と比較すると、「図形」と「関数」の領域に課題がある。
- ▲ 出題形式の記述式においては、最終問題の「式と言葉の両方を使って問題を解く方法を説明する」ことについて課題があり、無回答率も他の設問と比較して高い。この設問の県平均正答率との比較では、正答率は若干下回り、無回答率は若干低い、ほぼ同率である。
- ▲ 児童生徒の平均正答率を前年度の該当学年と比較すると、中学校1年は－1.5P→－4.5Pと下がっている。

- ★ 児童生徒自らが問題解決に向けての見通しをもち、数学的な表現を用いて筋道を立てて図等を活用しながら説明し合う学習を重視することや、適用問題の確実な実施等の取組により、多くの問題解決体験をすることが必要である。

これらのことに迫るため、指定校の取組への支援を充実するとともに、その取組の成果を各学校へ広げていく。

<英語>

- 中学校1年は対話の流れに合った英文を書く問題において、県平均を1.7P上回っている。
- 中学校2年は県平均正答率との差が-0.9Pではあるが、「聞くこと」の領域、文法の知識・理解の問題においては県平均を上回っている。
- ▲ 「書くこと」の領域において、中学校1年が-4.5P、中学校2年が、-4.0Pと県平均を下回っている上、無回答率が高く、課題があると言える。
- ▲ 中学校2年は、まとまった英文を読んで概要や要点を捉えることに課題がある。
- ★ 「英語を使って何ができるようになるか」という単元ゴールを設定するとともに、目的、場面、状況を設定し、生徒が英語を使って気持ちや考えを伝え合うなどの言語活動を充実させていくことが必要である。
- ★ 教科書等を読む際には、1文ずつ理解するのではなく、初見のまとまった英文から必要な情報を取り出すために、目的を持って読むなどの活動を繰り返していくことが必要である。
- ★ 自分自身のことについて、また聞いたり読んだりしたことについての感想や意見のやりとりをし、その内容について、まとまった英語を書くといった領域統合の活動をしていくことが必要である。

(3) 該当学年の県平均正答率差の経年比較について

- 小学校6年は、5年のときの調査と比較すると、県平均正答率との差が国語-0.4P→0.3P、算数-4.3P→0.3Pと、ともに伸びてきている。
- ▲ 中学校1年は、小学校5年のときの調査と比較すると、県平均正答率との差は、国語-0.3P→-3.2P、数学1.0P→-4.5Pと下降している。
- △ 中学校2年は、小学校5年のときの調査と比較すると、県平均正答率との差は、国語0.0P→-0.1Pでほぼ同率、数学は1.9P→-0.9Pで下降している。英語は中学校1年のときの調査と比較すると、-1.1P→-0.9Pと伸びてきている。

5 生活・学習に関する意識調査の状況

(1) 授業改善に関わること

平成26年度より追跡調査を行っていた下記質問項目について、来年度からは、再検討することとしているため、調査開始時の平成26年度と本年度の結果を比較した。

※ 対象は小学校6年及び中学校3年で「当てはまる」と回答した割合を示し、下線は20P以上の数値の伸びを表す。

| 質 問 項 目 | 小学校6年 | | 中学校3年 | |
|---|-------|-------------|-------|-------------|
| | 平成26 | 令和3 | 平成26 | 令和3 |
| ①授業の中で目標（めあて・ねらい）が示されている | 33.2 | <u>53.4</u> | 24.2 | <u>58.4</u> |
| ②授業では、自分たちで課題を立てて、その解決に向けて情報を集め、話し合いながら整理して、発表するなどの学習活動を行っている | 18.8 | <u>47.4</u> | 15.1 | <u>55.3</u> |
| ③自分の考えを発表する機会が与えられている | 41.2 | 61.1 | 35.5 | <u>62.0</u> |

| | | | | |
|--------------------------------|------|-------------|------|-------------|
| ④課題解決に向かい自分で考え自分から取り組んでいる | 30.2 | 27.0 | 18.3 | <u>46.9</u> |
| ⑤授業では、話し合う活動をよく行っている | 44.7 | 57.4 | 33.4 | <u>64.8</u> |
| ⑥話し合う活動を通じて自分の考えを深めたり広げたりできている | 20.6 | <u>48.6</u> | 16.7 | <u>59.6</u> |
| ⑦授業の最後に学習を振り返る活動を行っている | 26.3 | 44.1 | 11.1 | <u>39.1</u> |

○ 小学校の「④課題解決に向かい自分で考え自分から取り組んでいる」を除いた項目において、調査開始時よりも「当てはまる」と言い切った児童生徒の割合は上昇している。各学校の授業改善が「主体的・対話的で深い学び」、特に「対話的で深い学び」に向かって取り組まれている。

▲ 「④課題解決に向かい自分で考え自分から取り組んでいる」については、小中学校ともに他の項目と比較して数値が低い。

★ 以下の2点を重点として授業改善の取組を進めていく。

- ・ 授業改善が進んできている対話的で深い学びに関わる「話し合う活動を通じて自分の考えを深めたり広げたりする」ことに関する取組。
- ・ 課題として挙げられる主体的な学びに関わる「課題解決に向かい自分で考え自分から取り組む」ことに関する取組。

(2) 前年度と比較して改善の見られた項目（主な項目のみ。数値は市の平均肯定率）

- 「自分のことが好き」について、小学校5年49.0P→55.1P、中学校1年53.4P→60.6P、2年50.2P→54.2Pと、前年度を上回っている。
- 「自分には良いところがある」について、小学校5年62.9P→68.1P、6年71.3P→71.3P、中学校1年68.8P→73.4P、2年60.9P→65.3Pと、前年度を上回っている。
- 「算数・数学の勉強が好き」について、小学校5年50.0P→52.8P、中学校1年51.6P→58.8P、2年55.0P→58.6Pと、前年度を上回っている。
- 「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがある」について、小学校6年42.2P→45.8P、中学校1年41.3P→43.2P、2年32.7P→37.5Pと、前年度を上回っている。
- 「知りたいことや疑問に思ったことを自分で調べたり、友達や先生に聞いたりして解決しようとしている」について、小学校6年64.6P→66.8P、中学校1年67.3P→67.8P、3年69.8P→72.3Pと、前年度を上回っている。

(3) 家庭学習について

- 「1日に1時間以上家庭学習をする児童生徒の割合」は、小学校6年は県の割合との差が-0.6Pでほぼ同率であるが、小学校5年は-11.2P、中学校1年-2.5P、2年は-4.0Pと下回っている。
- 昨年度の浜田市の同学年平均と比較して、小学校6年-3.6P→-0.6P、中学校1年-4.5P→-2.5P、3年-5.3P→-4.0Pとなっており、改善傾向は見られている。

(4) メディアについて

- 「1日に2時間以上テレビ、ビデオ、DVDを見たり聞いたりしている児童生徒の割合（勉強のためやテレビゲームを除く）」は、小学校5年は県平均と比較して7.0P、6年は0.5P、中学校2年は0.5P多く、中学校1年は0.5P少ない。
- 昨年度の浜田市の同学年平均と比較して、小学校6年49.4P→46.8P、中学校1年42.8P→38.6P、中学校2年43.8P→37.2Pとなっており、若干ではあるが改善傾向は見られている。

(5) 読書及び学校図書館活用について

- 「1日に30分以上読書する児童生徒の割合」は、中学校3年が5.5P県の割合を上回り、小学校5年は3.4P、6年4.1P、中学校1年1.5Pと下回っている。
- 「学校図書館を使った授業は、ほかの授業を行うときにも役立つと捉えている児童生徒の割合」は、小学校6年が4.7P、中学校3年が10.5P県平均肯定率を上回り、小学校5年は7.7、中学校1年が4.6Pで県平均肯定率を下回っている。

6 今後の対応

- 全ての小中学校への学校訪問指導を複数回実施する。その際、授業改善プランとして示す「子どもの声でつくる授業」に基づき、授業構想段階から関わることで校内研究や授業者への支援となる学校訪問としていく。また、子どもの学びの事実に基づいた研究協議を推奨し、授業研究の質が向上するように支援していく。
「協調学習」「図書館活用教育」の取組を柱とした教師の授業力向上に向けた取組も継続する。
- 国語を要とした読解力の育成及び小学校算数の授業改善について、指定校の取組を核としながら推進し、成果を各学校へ広げていく。
- 家庭学習の時間、メディア接触については、改善が見られる学年はあるものの依然として課題がある。これらへの取組として、取組期間を決めて児童生徒自らが目標を設定して実践をしていく取組が行われてきている。この取組が日常的な取組となるようにしていく。家庭で過ごす時間について、児童生徒が自らコントロールする力を育成していく取組を通して、「家庭学習時間の確保」「メディア接触時間の適正化」、「読書時間の確保」等につなげていく。小中連携教育やPTA活動との連携を深めるなどの取組を継続して、保護者への啓発も強化していく。
- 「ICTを活用した授業改善指定校」の取組を継続し、授業における一人一台端末の効果的な活用の在り方を各学校に広げる。また、ICT機器を活用した授業実践の好事例を授業実践例として公開していく。これらのことにより、児童生徒一人一人の学習状況に応じた個別学習の充実や児童生徒同士が考えを共有し話し合いを深めていく授業の実現を目指していく。
- 授業の質を向上させ、学力を育成していくためには、学校、学級が「安心、安全で信頼できる場」であることが欠かせない。「学級づくり」等の取組を各学校が組織的に取り組んでいけるように支援をしていくことに努める。